

中世前期学僧と近世書写一寺院縁起をめぐる二、三の問題

——意教上人頼賢を軸に——

牧 野 和 夫

一、はじめに

近世に撰述された諸々の本にみえる頼賢の伝記は、おおむね『続伝燈広録』に収載された頼賢の伝記に類似したもので、『密教大辞典』の内容も同じである。今回の問題点は、次の記述の傍線部分にある。

「頼賢は意教流の祖で、意教上人と号す。幼くして醍醐山に登り、成賢僧正に仕えて出家した。1231年8月、一宗の大事及び師資相伝の口訣をすべて附伝されて、頼賢は高野山金剛三昧院の安養院に移り開基となった。龜山天皇は頼賢の噂を聞き、法橋上人位をお授けになった。また鎌倉幕府の依頼により関東に下向し、將軍頼經の崇敬を受

けて、常楽寺などの開山となった。」

慈猛ゆかりの地方寺院が所蔵する下野薬師寺の縁起類（二系統ある）に載せられた頼賢の伝記にのみ、『密教大辞典』の内容と異なる独自の記述がある。室町時代末から近世初期に書写された地方の学問寺院の縁起に、全く新しい頼賢の伝記が記されていた。この相違点を、近世の『続伝燈広録』や、下野薬師寺縁起類へ至る伝承の過程にたどり、頼賢の伝記の残り方（消え方）を考察する。近世の僧伝と、寺院（特に談義所・学問寺）に伝来する資料との関わりのある一つのケースを示したい。

二、新しい頼賢伝（慈猛伝）

安国寺所蔵の1677年の年記をもつ下野薬師寺の縁起『薬師寺縁起』には、従来語られることのない頼賢の伝記の記事が、次の如く認められる。「1235年に頼賢は、將軍頼経から意教上人の号を賜り、下野講師（＝薬師寺貫主）に任ぜられる。その頃、東大寺別当の頼暁は、謀叛の張本人であつた。謀叛の僧と同名なので頼賢は改名した。」と記されている。

『南河内町史』史料編2 古代・中世（第二卷）（平成3年3月 P 532）に

〔付載〕薬師寺縁起 ○南河内町薬師寺安国寺所蔵

薬師寺縁起 貫翁撰述之、

天武天皇治世九年白鳳八年、皇后病、創薬師寺度一百人：

：

文曆貳年、將軍頼経（九条）公延頼賢阿闍梨、進上人賜号意教上人、遂任下野講師、〔薬師寺貫主／即龍興寺也〕、文曆貳年三月初也、意教固辞不許、且武命且勅意也、意教上人之本名頼

暁也、後名改頼賢也、東大寺別当有頼暁僧、謀反之張本也、因為謀反之僧同名改頼賢也、

私云、東鏡有頼暁也者、則頼賢阿闍梨也、即意教上人之仮名也、

とある。

永村真氏「下野薬師寺の再興」『栃木県史研究』20号（1981年2月 P 2）に、「古代以来の下野薬師寺の由来について記した史料として、」（A）～（F）の六本の伝本を挙げる。

（A）薬師寺縁起 天正二年晃榮記 安国寺所蔵

（B）薬師寺縁起 延宝五年龍興寺貫翁記 安国寺所蔵

（C）龍興寺戒壇縁起 天長元年上浣記／享保十年玄空

書写 龍興寺所蔵

（D）薬師寺戒壇縁起 天長元年上浣記 「下野国誌」六

所引

（E）薬師寺要録 「下野国誌」六 所引

（F）慈猛上人行状記 （C）と同卷 龍興寺所蔵

さらに

Ⅱ 下野薬師寺の盛衰 「南河内町史」第九卷（古代・中世）所収）において、

（C）龍興寺戒壇縁起 天長元年上浣記／「享保八年癸卯八月吉祥日朝覚書写」（改訂か）龍興寺所蔵

そのほか、

龍興寺縁起略記 龍興寺所蔵 明治時代書写

薬師寺戒壇縁起 「寺社縁起集」巻七所収

の二本をも加えて考察し、二系統に分類整理が進められた。前引安国寺所蔵薬師寺縁起は(B)に該当する。ちなみに「寺社縁起集」は、日本大学総合学術情報センター蔵のもの、「享保八年癸卯八月再写」とあり、「(C) 龍興寺戒壇縁起 天長元年上浣記 / 「享保八年癸卯八月吉祥日朝覚書写」の転写か。末に「此縁起ハ則薬師寺邑の田中といへる処の野口氏の秘蔵せしをかりえてうつしたる也野口氏は龍興寺の檀頭にて薬師寺の旧家なり」と記し、黒川春村の案文が添えられる。「春村按に此書文義拙劣なり後世の偽造に係れり……」と。

未見。久野俊彦氏に解題がある。当該書は黒川真頼旧蔵の「寺社縁起集成」で、集古会の有力会員の「縁起」展観・研究の層の厚さを示す一点である。集古会と寺院縁起の問題は、別に稿を改めるとして、先にすすめる。

この下野薬師寺類縁起の慈猛伝の独自記事を統合し、金沢文庫蔵資料を参照しつつ、永村眞氏は新しい慈猛の事績を追跡した(「下野薬師寺の再興」〔栃木県史研究』20号、1981年2月)ほか参照)。永村氏は、頼賢の上記の事績について考えるなら、頼経から意教上人の号を賜ったと

いうことは考えにくく、補任の記事も信憑性が高いとはいえない、とし、頼賢をめぐるこの様な記事を生み出させた背景について、「実相院に住持した頼賢が將軍頼経の崇敬を受け関東に下向した事実、頼賢の資たる慈猛の薬師寺長老としての位置」があったことを指摘している。

「龜山天皇聞其德声。宣賜法橋上人位意教論旨。時応鎌倉之請。」(『続伝燈広録』巻十二、続真言宗全書本)

この『続伝燈録』の記述についても永村氏は、龜山天皇の在位は1259年から1274年の間で、一方頼経の在職は1226年から1244年の間で、明らかに矛盾する」と指摘した。

その後には公刊された甲田宥咩氏の論考は、高野山諸院蔵の聖教奥書や、宝亀院所蔵本・「尾張国」の万徳寺所蔵本などの『覚禪鈔』の奥書を蒐集・整理し、多くの新知見を学界にもたらした(「意教上人傳攷(上)」〔高野山大学密教文化研究所紀要』12号、1999年1月)。それによると、意教頼賢は、1230年に「西山法華山寺」において、寛信『伝受集』を書写したのち、1249年頃まで『覚禪鈔』書写を継続し(萬徳寺本により確認)、『佛教美術研究 上野記念財団助成研究会報告書「図像蒐成」ⅡⅤ』)、さらに1261年頃、書写を再び始めたという。

甲田氏の指摘は、意教が当初からの坊号であることや、

法華山寺慶政と頼賢・慈猛との直接の関係を指摘するなど、従来の頼賢・慈猛伝と全く隔絶した内容を含むものであった。

甲田氏は、「続伝燈広録など」には、頼賢は直ちに高野山へ登ったように記されているが、そうではない。頼賢が1246年頃までは西山法華寺に住していたことが、聖教類の奥書から明らかである」と指摘し、「意教上人が隠遁生活に入った住所はどこであろうか。前の諸書（続伝燈広録など）には直ちに高野山へ登ったように記されているが、そうではない。寛元四年（一二四六）頃までは西山法華寺に住していたことが聖教類の奥書から明らかである。」（甲田宥畔氏「意教上人伝攷（上）」〈『高野山大学密教文化研究所紀要』12号〉と的確にして矛盾のない「新しい頼賢伝」の重要な一齣を提示したが、事相関係の聖教類の奥書以外に補強すべき傍証（後述の事情による）がなく、事相類聚書『覚禅抄』の書写伝流の相承世界に限定されたひとつの事実としてうけとられたようで、その後、頼賢とその周辺を九条家に結ぶ新たな展開はなかった。

頼賢の房号については、甲田氏の指摘「醍醐本血脈の細注には「後意教上人」とあり、又三代付法記にも「御遁世の御法名を意教上人と号す」とあって、後に改名したようにも読めるが、亮禅の記には「意教房」とあるから、初め

から意教房頼賢と称していたもの（前掲論文頁4）と考えられる。今後の課題として醍醐寺本血脈の「注記」時期の確定が必要となる。また、「意教房」については、「亮禅の記」と同じく、湯浅吉美氏「東寺観智院金剛蔵『三國相承秘密傳法一門血脉』の翻刻」（『成田山仏教研究所紀要』28号（2005年2月））に紹介された血脈に次のようにある。

「道教

憲深（座主権僧正報恩院／侍従通成朝臣息）」

（略）

「頼賢（卿阿闍梨 意教房）」

という注記である。「卿阿闍梨」の注記については、甲田氏の次の記述に従えば、新たな不審が残る。

「伊藤宏見師が『印融法印の研究』下に紹介される横浜宝生寺蔵「要尊道場観（石山）」一帖の奥書に見える弘安八年（一二八五）の頼賢（同書三六七頁）と『鶴岡脇堂供僧次第』（続群4下・九二八下）に見える文和三年（一三五四）から貞治六年（一二三六七）まで供僧を勤めた卿阿闍梨頼賢（「東」と注するので真言宗）である。年代的には

七十年程隔たっているので、この両者も別人であろう。」

この別人頼賢の混同説を「意教上人鎌倉下向の話」が生成する背景のひとつの要因に挙げているほどである。

今後の実物調査に拠る新知見に解明の手がかりを得るほかない。

頼賢に関して、新たな展開を可能にした一事実は、中国の出版物（宋版大藏經補刻葉）に残存した施財刊語「日本法華寺意教（頼賢）」の発見である。倭成図書館蔵（開元寺版）『大般若波羅蜜多經』卷六十・一帖（183・2 古466・貴1・9 E）の第八板第一面と第二面の折目の版心に「 宙 十卷 八 日本国北京法華寺比丘意教捨」という補刻施財刊語のあることである。

この開元寺版大藏經補刻葉に「北京法華寺比丘意教」との刷印（倭成図書館蔵）があったことに前引の如き「意教房」の考証をあわせるならば、即ち、十三世紀前期に意教頼賢が入唐し、法華山寺による宋版一切經補刻事業の一翼を担っていたことが判明したことになる。

一二三四年から一二四四年の約十年の間に行われた福州版大藏經補刻事業に日本の法華（山）寺慶政とその門下僧などが参画し、長財を喜捨したこと、その補刻事業に「下州千葉寺了行」も加わっていたこと、その「了行」が『吾妻鏡』建長三年十二月の謀反事件の張本「了行」であり、

石井進氏の解明された日蓮遺文紙背文書中の「れうきやう」であること、これらに関して「宋版一切經補刻葉に見える「下州千葉寺了行」の周辺」（『東方学報 京都』第73冊 2001年3月）、「我邦船載東禪寺版の刷印時期についての一事実——東寺蔵一切經本東禪寺版と本源寺蔵一切經本東禪寺版の刷印時期——」（『東アジア出版文化の研究』第6号、2004年）などの拙文や野口実氏「了行とその周辺」（『東方学報 京都』第73冊 2001年3月）を参照戴きたい。ここでは詳細は省く。

甲田氏の解明した聖教奥書から帰納した伝記的事実に九条道家と謀反人・了行との関係（中山法華経寺蔵日蓮遺文紙背文書参照）を統合することで（石井進氏〈同著作集巻7所収〉「2 日蓮遺文紙背文書」参照）、1235年時点で「意教」と称していた頼賢が、謀反事件との関連を疑われる可能性のあったことを示すことができたのである。

さらに1235年前後の了行についての新出資料出現とその検討によって、新たに次のような事実が浮上し、頼賢伝（慈猛伝）の問題に及ぶことになる。新出資料とは渋谷亮泰編『昭和現存天台書籍綜合目録』（昭和一八年）などに全く紹介のない『観音玄義料』一卷であり、新たな事実とはその書写奥書に記されていた了行入宋の事実である。

二〇〇八年四月一日（火曜日）付け『京都新聞』（『産経新

聞」二〇〇八年四月一日（火曜日）など）に「これまで存在が知られていなかった天台宗の仏典「観音玄義科」が三十一日までに、金剛輪寺（滋賀県愛荘町）から滋賀県教委の調査で見つかった。」として、紹介記事が掲載され、滋賀県教育委員会のご好意により引用のご許可を頂いた同委員会の報告書に基づき、必要な書誌事項等を抜書きし紹介した（牧野「十二世紀後末期の日本舶載大藏経から尙然將來大藏経をのぞむ」（『海を渡る天台文化』（2008年 勉誠出版））典籍である。金剛輪寺本坊である明寿院の土蔵に伝来した未調査の経典聖教類の一点で、首・尾題は同じ「観音玄義科」、書写奥書および伝領奥書は以下のとおりである。

（書写奥書）嘉禎三年丁酉七月二日、於東洛楊梅大宮一乘弘通之法家ノ十一面觀世音菩薩御宿房書寫了、此科前代未度也、為了行上人渡唐之時求得此科本、帰朝之次將來 干時嘉禎二年丙申夏

〈伝領奥書〉「□豪／□鎮／□了／□豪／□了／□喜／□受了／□豪宗／□了／□豪恵／於願徳寺奉受了／□豪承／永正十七年六月六日於願徳寺奉受了／源祝」

ここに「観音玄義科」という典籍が鎌倉時代前期の嘉禎二年（一二三六）に、入宋僧の了行上人の手によって初め

てわが国に将来されたことが知られることとなり、金剛輪寺藏本は、その原本を底本に翌年七月二日、京都・楊梅大宮にあった「一乘弘通之法家」において書写されたものであることが判明したのである。「了行は鎌倉御家人である千葉氏の出身と考えられる。宋版経の開版に関与したことや九条家と結んで鎌倉幕府に謀反を企て捕らえられたことなどが知られ、入宋僧の一人ではないかといわれていたが、これまでは実証する史料を欠いていた。」（滋賀県教育委員会の報告書）と指摘する通りである。解題文中の一説は、一三三四年から一三四四年の約十年間の一時期渡宋して、宋版大藏経の補刻事業に慶政の許で関与した「千葉寺了行」（千葉氏の出身と考えられる）が、九条家と結んで鎌倉幕府に謀反を企て捕らえられた「了行法師」（『吾妻鑑』）や中山法華経寺藏日蓮自筆聖教紙背文書に登場する「れうきやう」と同一人物なのではないか、ということなどの推定（牧野「宋版一切経補刻業に見える「下州千葉寺了行」の周辺」・野口實氏「了行とその周辺」（『東方學報京都第七三冊』二〇〇一））を試みてきたことを指しているが、この奥書は、了行が実際に南宋へ渡航していたことを実証補強する新史料の発見ということになる。

了行の渡宋・唐土滞在期間と頼賢のそれとは、若干の異なりがあった。千葉寺と法華山寺との違いもある。しか

し、ほぼ滞留期も重なり同一時期といつてよく、九条家とのつながりがいずれも緊密であることをもつてすれば、了行と頼賢とのつながりを想定して不思議はない。

石井進氏の論文〈同著作集巻7所収「2 日蓮遺文紙背文書」からうかがえる「りやうきやう」は、端的に言えば（野口氏の纏めに従えば）、次の四点にまとめられるのである。

1 京都の九条家（撰閑家、四代將軍頼經の生家）と千葉氏の間に介在。

2 内裏造営において、九条殿（道家）の意を挺して千葉氏に用途の沙汰などを命ずる有力者。

3 内裏造営の功を「いづみ左衛門」と争い、小城郡から上洛してかれに奉仕している千葉氏吏僚を大いに畏怖させている。

4 内裏造営の用途は五百貫以上の額にたつしたが、かれに名よつて利銭を借りて調達することができた。これに加えるべき点がある。『吾妻鑑』によれば、建長六年（一二五四）に至つて如意寺の営作のために「了行法印の造り置いた京都の持佛堂ならびに宿所等」が寄進されたことである。

「嘉禎三（一二三三）年」の「東洛楊梅大宮一乘弘通之法家／十一面觀世音菩薩御宿所」は、建長六年（一二五

四）に至つて如意寺の営作のために寄進された「了行法印が造り置いた京都の持佛堂ならびに宿所等」に該当するか（日蓮遺文紙背文書に九条家と「大宮」を結ぶ史料もある）、と思われる。もし、この推測が可能となれば、了行法印の造り置いた京都の持佛堂ならびに宿所が嘉禎三年以前、即ち了行の渡宋以前に既に存在していたことになる。更にこのあたりの経緯を解き明かすことは寺門僧隆弁（あえて文学史の圏内でいえば宇都宮歌壇の交流圏）とも絡み、今後の検討課題となる筈であるが、ここに詳述する余裕はない。簡略な年表をもつてあらあら辿るならば、次のようになる。

建長二年（一二五〇）二月、隆弁、園城寺復興を幕府に申請

建長二年（一二五〇）十一月付「九条道家初度惣処分状」

建長三年（一二五一）・南宋淳祐十二年

書陵部蔵一切経最終補刻刊記

正月、泰胤卒。

十二月、了行・矢作左衛門尉らの謀反事件。

建長四年（一二五二）慶政、憲静勸進の泉涌寺版『四分律

刪繁補闕行事鈔』に捨財。

六月八日、宣陽門院没（七十二歳）。

建長五年（一二五三）隆弁、十月二日に園城寺境内の如意寺興隆のため上洛

更に十二月廿八日に如意寺鎮守諸社を鎌倉に勧請
建長六年（一二五四）「了行法印所造置京都之持仏堂、并宿所等、被寄進如意寺當作也、今日有評定、」

建長七年（一二五五）笠間時朝、常陸国鹿嶋社に将来宋刊

大藏經（思溪版）を奉納、奉納供養の導師は隆弁
正元元年（一二五九）撰者未詳聖教断簡末に「正元元年

円海」と墨書。八月、円海、慶範撰『宝秘記』書寫

弘長元年（一二六一）定俊入宋、宋刊大藏經（金澤文庫本）二部将来

頼賢門下の慈猛に関しても、一般には次のように理解されている。意教和尚の徳望を耳にした慈猛は直ちに鎌倉の頼賢のもとに赴く（『続伝燈広録』卷十二、続真言宗全書本）、と。

『密教大辞典』によれば、「ジミヨウ」の項目に

「慈猛 一二二二／一二七七

慈猛流祖、下野薬師寺長老、字は良賢、空阿上人又は留興長老と号す。初め南都招提寺に遊び、又諸方の戒関を叩きて律学を究む。寛元三年歳三十四、高野山金剛三昧院に於

て意教に従ひて伝法灌頂を受け、次で東関に赴て苦修し、その瀉瓶を得。」

とある。

甲田宥咩氏の指摘のごとく、頼賢は1245年には西山法華寺に滞在して『覚禅鈔』を書写していた。

万徳寺蔵『覚禅鈔』（『新修稲沢市史』資料編7古代中世）などによると、慈猛は、1245年の時点で既に西山法華寺に滞在し、おそらく慶政に対面し師事していたのであり、頼賢にも師事していたのであろう。しかも彼は、「空阿」（比叡山修行時代の名）「慈猛」という名をほぼ同時に使用している。また、頼賢の弟子阿月房も法華山寺で『覚禅鈔』の書写（頼賢の命による）に励んでいたことが知られた。これら頼賢門下の学僧についての伝記的な変容（改名を軸に）に関しては別稿に譲る。

「文暦二年」「意教」「謀叛」という三つのことばが揃って相互に関連する事柄として記述される近世期書写（内容記事は室町期に遡る。薬師寺は度々の焼失にあう）の下野薬師寺縁起は、頼賢嫡々の門下の学僧慈猛ゆかりの伝承を否定的な言辞で「改名」という「行為」に結びつつ、「意教上人之本名頼曉也、後名改頼賢也、東大寺别当有頼曉僧、謀反之張本也、因為謀反之僧同名改頼賢也」と伝えた、といえるのではないか。近世の『続伝燈広録』（その後の通

説)に明らかな矛盾を犯してまで記述された内容の弥縫し難い不手際は、頼賢の入宋・謀叛張本了行の入宋、慶政と背後の九条家並びに下された「勅勘」を、極めて早期の時点(謀反発覚処罰とほぼ同時に始まるか)以降に伝記的な視界(宗派的な視界をも含む)から排したところで生じた筈と考えるべきものであろう。

三、新たな頼賢・慈猛伝と近世の学問寺縁起の場 合

慶政と結びつき、慶政や法華山寺一門の渡宋(一切経補刻など)事業などと同時期に渡宋した了行も、また九条道家と深く結びついて、京都にも持仏堂などをもち活動していた。建長三年(一二五一)に謀叛の罪で了行が捕縛され、九条一門の人々は僧侶も俗人も多く勅勘を蒙った。慶政や頼賢についても、この謀叛との関連を疑われる可能性はおそらく当時からあったことになる。

この間の推移については、三田武繁氏「撰関家九条家の確立」(『北大史学』40号 2000年11月、その後『鎌倉幕府体制成立史の研究』(2007年12月、吉川弘文館)に収録)に適切な記述があるので、少しく長い引用を許して頂く。

「道家の見通しは甘かった。建長三(一二五一)年十二

月末、了行法師らの陰謀が発覚する。「歴代皇紀」は、「九条大御堂住僧了行房、称勧進、謀反廻文結構露頭」と述べ、「保曆間記」は、逮捕された了行法師が、「先将軍頼経、京都ニシテ世ヲ乱ントアル」と供述したことを伝えるが、「謀反」の具体的な内容は明らかではない。ただ、「九条大御堂住僧了行房」なる呼称や、了行法師の供述内容から容易に推測されるように、九条流一門はこの陰謀への関与を幕府に疑われ、壊滅的な打撃を被ることになる。翌建長四年の二月にまず將軍頼嗣の更迭が決定され(京都への送還は四月)、六月には道家の子の円実と慈源がそれぞれ大乗院門跡と青蓮院門跡の地位を逐われ、遂に忠家も、七月二十日、右大臣を解任されてしまうのである。

この一連の解任劇は、上述の実経の解任と大きく異なるところがある。改めて確認すれば、実経の解任は幕府主導によって行われたであり、治天の君である後嵯峨上皇はむしろ消極的であったとさえいえる。しかし今回は、幕府主導であることはもちろんであるとしても、今回の解任劇に関する多くの史料に共通して用いられている「勅勘」という語が示すように、後嵯峨の主體的な意志による解任であったのである。想像をたくましくすれば、今回の解任劇の直接の発端となった了行法師らの陰謀の一部に、後嵯峨上皇や後深草天皇の地位にかかわることが含まれていたも

のと思われる。」(頁9)

陰謀発覚の記事は、『歴代皇紀』や『保曆間記』、『吾妻鏡』建長三(一二五二)年十二月二十六日条、二十七日条、『鎌倉年代記』(『増補続史料大成』裏書建長三年十二月七日条、『武家年代記』裏書建長三年十二月二十七日条、『関東評定衆伝』(『群書類従』)建長三年条などに簡略な記述があるばかりで、いずれも陰謀の内容には一切ふれていない。三田氏も当該論文の注(51)に道家の子の解任について『大乘院日録』建長四年六月二十三日条、『華頂要略』(『大日本仏教全書』、卷五之二、門主伝第五、慈源の項、および同書卷五之四、門主伝第七、最守の項。)を挙げた後に「注(53)」として「法助が何故失脚を免れたのか、その理由は明らかにしたい。前年の建長三年二月に後嵯峨皇子の省仁親王(後の性助入道親王)が法助の許に入室しているが、このことが影響しているのであろうか。」と推測する。九条一門の法助など、東密系の僧侶が勅勘をまぬがれたように、その理由は明らかにしたいが、慶政や頼賢、その門下の僧侶も、その災いを逃れたのである。

築島裕氏「醍醐寺蔵本「伝法灌頂師資相承血脉」解題」
『醍醐寺文化財研究所紀要』一号 1978年)に拠って
頼賢の門下を示しておく。
三宝院流成賢―頼賢(卿阿闍梨/後意教上人)「貞応二

―九―二十一―

頼賢(意教上人 入唐) | 憲浄(願行上人)

空阿(入佛房)

静空(満月房)

阿日(阿月房)

思融

義準(明信房)

実融(証道上人)

空阿(入佛房)が後に改名して慈猛となる、下州薬師寺縁起にゆかりの学僧である。憲静・慈猛・思融・実融・義準の諸伝記については、寺社縁起研究会で口頭発表を終えている。追って別稿を設ける予定であるが、既述のものとしては、牧野「十三世紀中後期をめぐる一つの「文学的」な場について―意教上人頼賢「入宋」の可能性より延慶本

『平家物語』と達磨宗の邂逅をめぐる一、二の問題に至る——（『中世文学』46号 2002・6）・同「延慶本『平家物語』と達磨宗——頼瑠周辺の一、二——」（『実践国文学』58号 2000・10）を参照願いたい。

頼賢門下の慈猛にゆかりの寺院にのみ残る伝承を手がかりに、近年次々と解明された諸事実を拾いつつ、近世書写の下野薬師寺縁起類へ至る過程に、残ったものと消えたものを細かく仕分けして中世前期の学僧頼賢の伝記的内容の変容をここに一覧表記して示す。

| | | | | | |
|------------|----------------|------------------------------|--------------|-------------|-------------|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① | |
| 1235年以降の謀叛 | 50年謀叛・捕縛 渡宋 | 1235年頃 了行（1235年） 意教と称す | 頼賢と慶政法華山寺の関係 | 頼賢入唐の件 | |
| ○ | × | ○ | × | × | 『下野薬師寺縁起』 |
| × | × | × | × | × | 『統伝灯広録』 |
| × | × | × | ○ | × | 万徳寺本他『覚禪抄』 |
| × | × | × | × | × | 『密教大事典』 |
| × | ○ | ○ | ○ | ○ | 東寺蔵『宋版一切経』他 |
| 日蓮遺文紙背文書 | | | | 醍醐寺蔵「相承血脉」他 | 参考 |

| | | |
|------------|------------|---------------|
| ⑧ | ⑦ | ⑥ |
| 阿月と慶政・法華山寺 | 慈猛と慶政・法華山寺 | 頼賢と関連して謀叛にふれる |
| × | × | ○ |
| × | × | × |
| ○ | ○ | × |
| × | × | × |
| × | × | × |

醍醐寺円海祐宝撰『統伝灯広録』系統に流れ込む資料には、①から⑧の全てを欠いており、「了行」謀叛にも触れず「薬師寺縁起」にのみ、③・⑤・⑥が存在することになる。頼賢が1235年に「意教」との名を持ち、了行の謀叛とのつながりを疑われることを懼れ改名した、とする（否定）伝承があった。この記述は暗に、頼賢が了行とのつながりを疑われていたことを伝える貴重な資料である。

即ち、下野薬師寺へ慈猛が下向して以降、その師頼賢と「了行らしき僧」の謀叛とのつながりを否定するという形で伝承され、嫡流の弟子たちに伝わった（天正本奥書の近世書写の）後に、近世書は寺院縁起の奇妙な記述として残った。東密・律（天台も）の流れにおいては、本奥書などに法華山寺慶政関連のつながりを示す頼賢資料が、「頼賢—慈猛」の師資相承の伝授システムに彩られた聖教類として残ることになった（万徳寺本『覚禪抄』など）もの、①②④⑦⑧に見る如く慶政・法華山寺という「場」に展開した「宗教的構想」（九条道家の宗教的構想としては、松

本郁代氏の提唱されるものがあるが、了行謀叛事件以降の「構想」に過ぎないのではないか。おそらく道家の権勢の絶頂期に展開した「構想」こそ、宋代仏教や異本『覚禪鈔』編成（とまでは云えないかもしれない）をも視野に入れた、一大構想ではなかったか、と考えることも出来る。なお、「構想」ということばは、松本氏の提唱に借りている）との関連の一切を頑なに拒むことになった。欠かざるを得ない資料的制約、そして資料的な欠如を齎した深刻な政治的状况（九条家の浮沈・一門没落の危機）が想像されるのである。

四、結びにかえて

—白毫院・法華〔山〕寺と天台談義所—

法華山寺周辺の資料は、台密の穴太西山流の学問寺にも指摘できる。

先に紹介した金剛輪寺藏『観音玄義科』の奥に澄豪（白毫院系）以降、台密穴太西山流歴代相承の過程を示す伝領血脈が附されている。

了行関連の資料が、白毫院（太子堂）経由かどうか不詳ながら、澄豪以降、おそらく西山宝菩提院に入り、穴太西山流歴代の相承過程で更に金剛輪寺へ転入したことは確実である。

近時、園城寺僧である円海が所持していた『宝秘記』が、前述の金剛輪寺本坊明寿院に伝来していたことが判明した（牧野『閑居友』をめぐる周辺資料—「円海」をめぐる一資料—『実践国文学』75号（2009年3月））。白毫院（太子堂）円光上人良含の孫弟子にあたる太子堂上人円海が、この『宝秘記』を所持した園城寺僧で、慶政在命中の法華山寺で『覚禪鈔』を書写した円海と同一人物であるならば（遍融も亦、園城寺〈東山霊山あたり〉系の学問に接していたか、と推測している）、円海所持の『宝秘記』も白毫院（太子堂）経由で澄豪門流の手許に入ったのではないかと考えられる。

渡唐僧の了行（法華〔山〕寺にゆかりをもつと予想される）に直結しうる聖教類が、西山宝菩提院に代々受け継がれてきたことで、天台学問寺の柏原成菩提院（穴太西山流歴代と密接に交流していた）が所蔵する1234年釈信豪写『金剛界大法対受記』巻八・大一帖の奥書識語「（4格アキ）寛喜四年五月十一日於法花（この下「智満」二字削、重書）寺中尾書了比丘信豪／以書本交了（別筆墨或別時墨）」にスリケチ・墨重書された「法花寺」の候補のひとつとして、慶政の「法華〔山〕寺」が俄かに浮上してくることにもなる（牧野和夫「中世天台談義所の典籍受容に関する考察—柏原成菩提院の場合—」『延暦寺と中世社会』

法蔵館、2004年6月刊）参照。このことは既に、伝承文学研究会平成20年度大会で発表しているので省略する。

義能（義準）ゆかりかと推察できる典籍（最近、達磨宗系典籍の断簡発見・紹介あり）や、法華山寺における書写を伝える往生伝類が真福寺の所蔵する聖教類に比較的豊富なこと（山崎誠氏「真福寺文庫蔵往生伝解題」〔真福寺善本叢刊 第七巻 往生伝集〕臨川書店 2004年1月）も、「慶政―頼賢―義能（義準）……」の意教流義能方の真福寺への色濃い流入を考えるならば、自然である（牧野が寺社縁起研究会で発表済み）。

九条家一門の多くが勅勘を蒙るに至る深刻な政治的事件であった入宋僧了行捕縛の一件が絡むゆえであろうか、つまびらかではないが、慶政と頼賢との宗教的な「場」を紹介したつながりをうかがわせる頼賢の伝記はない。しかし、少なくとも近世書写（さかのぼったとしても室町時代最末期成立）の下野薬師寺縁起にのみ、1235年頃の頼賢と謀叛とのつながりを「改名」一件にかけて否定する形で、頼賢と謀叛とを結ぶ奇妙な伝承が残ることになったのは確かである。

* * *

本誌に度々ふれることのあった「円海」なども絡むが、随心院蔵の建武元年書写『陀納深密口決』一帖などの書写

者禅律（律のよみに若干の不審あり）と建武四年書写『阿婆嚩鈔』香葉（平成二十年東京古典会大入札会目録・49番）の書写者禅澄（金剛輪寺などの関連）など、今後の課題は多い点、付記する。

* * *

本稿は、科研費（挑戦的萌芽研究）番号200652007〈分担研究〉による研究成果の一部である。

なお、本稿の一部は「Books in Seminary Temples and Early Modern Sōden-Engi (monk-biographies and temple-histories) narratives : an Analysis centered on accounts of Raiken」の標題で英訳、LIAS (Leiden Institute for Area Studies) 主催の研究集会（2009・6・1〜3日於ライデン大学）での発表資料集に収載されたことを附記する。

（まきの かずお・実践女子大学教授）